Trinity

キズナエピソード\_東山陽彩\_01

１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０１２３４５６

１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０

------------------------------------------

//ヴィジュアルノベル形式開始

悪魔どもとの激しい戦いに勝利した俺たち。

そんな時、俺は陽彩に話しかけられた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

[オムニス]

「陽彩、今日は調子よかったな！

おかげで助かった」

[陽彩]

「ん……そうか」

[オムニス]

「どうした？

にやにやしちゃって。、

もしかして褒められて嬉しかったのか？」

[陽彩]

「なっ!?

そ、そんな顔はしていないっ！」

[オムニス]

「……！」

[陽彩]

「……？

どうした、オムニス？」

[オムニス]

「……いや、なんでもない。

そろそろ、ここから離れよう」

//ADV形式終了

//暗転

//場面転換：白い部屋

//ヴィジュアルノベル形式開始

白い部屋に戻って来た俺は、感慨深くため息を吐いた。

「なっ!?

そ、そんな顔はしていないっ！」

この言葉に強い既視感を覚える。

まるで学生時代の青春の匂いが思い起こされるような、

そんな感覚……。

そんな時――

//ページ切り替え

突如として、俺は耐えがたい睡魔に襲われる。

視界がぼんやりとしたモヤに包まれる中で、

俺は知りもしない記憶を垣間見た。

それは、とある休日……。

その時の俺は、大型書店に本を見に来ていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//とある大型書店

[陽彩]

「うぅ……。

少し本を積み重ね過ぎた。前が見えないな。

レジはたしか……おっとっと」

[陽彩]

「……っ！　しま――」

[とびお]

「……っとと、大丈夫？

俺もレジまで持って行くの手伝うよ」

[陽彩]

「いや、結構。

ぼく一人で大丈夫だ」

[とびお]

「でも、ふらふらじゃないか。

棚にぶつかって転びかけてたんだ

危ないぞ？」

[陽彩]

「それは、たまたま――」

[とびお]

「わかったわかった、

とりあえずお兄さん手伝うよ。

はい、半分もらうね」

[陽彩]

「なっ、勝手な……」

=========================スチルカットシーンA終了=========================

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

レジへ向かいながら話を振ってみると、

どうやらいつもこの書店で大量に本を買い

近くのカフェでコーヒーを飲みながら読書にふけるのが

彼女のお決まりのコースらしかった。

俺は、見た目に似合わず大人びた言動のこの子に

興味が湧き、一緒にカフェへと同行することにした。

道中、自己紹介をすると

「東山陽彩、私立武良穂1年」

とだけ返してくれた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//背景:とあるカフェ

[陽彩]

「……結構混んでいるな……

仕方ない。家に帰ってゆっくり読むとするか」

[とびお]

「うーん……、

あ！　あそこ１テーブル空いてるから

一緒に座ろう」

[陽彩]

「いや、ぼくは本に集中したいから――」

[とびお]

「いいからいいから、陽彩は何飲む？」

[陽彩]

「…………」

//◆画面転換

[とびお]

滅茶苦茶イヤそうな顔をした陽彩が、

しぶしぶといった様子でカフェの席に座ってから、

もう一時間は経つだろうか。

[とびお]

その間、一切会話はなく、

陽彩は無言で本を読み続けていた。

[陽彩]

「…………」

[とびお]

すごい集中しているな……。

そんなに面白い本なのだろうか。気にはなるものの、

邪魔してはいけないので、俺は静かにコーヒーを飲む。

[陽彩]

「……ふう」

[とびお]

読み終えたのか、陽彩は静かに本を置く。

それを見計らって、俺は声をかける。

[とびお]

「なぁ、その本そんなに面白いのか？

読んでいる間、口元が大分緩んでいたけど」

[陽彩]

「なっ!?

そ、そんな顔はしていないっ！」

[とびお]

「それ、どういう本なんだ？」

[陽彩]

「ざっくり言うと、異星人との戦争をしている世界で、

戦死しても一定の時間に戻れる能力に目覚めた主人公が、

全人類を救うというSF小説だ」

[とびお]

「おぉ、つまりループものだな！

そういう題材のアニメとか漫画とか結構好きだぞ」

[とびお]

「あ、もしかして、

主人公の他にも

その能力に目覚める奴が出てきたりするんじゃないか？」

[陽彩]

「おお、やるじゃないか。

実は、異星人の中の一部は命が絶える瞬間に、

死ぬ前のある一定の時間に戻れるんだ。」

[陽彩]

「主人公達はその異星人の力を得たんだ。

だから、死んでも死ぬ前の時間に戻れるようになって、

このループの設定がまた物語に上手く――」

[陽彩]

「っ……すまん。

つい熱くなって話し過ぎてしまった。

ぼくとしたことが……」

[とびお]

「ははっ、いいんだよ。

もっと話を聞いていたいんだ」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

俺は自然と陽彩の頭を撫でていた。

またイヤそうな顔をされるかと思ったが、

意外にも彼女は頬を赤くしてうつむいているだけだった。

それから少しして、陽彩はまた読んでいた本のことを

嬉々と話してくれた。

俺はその姿にどこか惹かれていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//1話END